熊日1968.05.10

水俣病は叫ぶ

(14)

市民の二重構造（上）

公害発生の抑止力に

対等になった工場・市民

水俣市は、かつては新日窒（チッソ株式会社の前身）の君臨する町だった。新日窒の管理職の社宅街である陣内社宅は、お高くとまった奥様族で知られていた。いまはそれほどでもないが、かつての工場と市民の、このような上下関係の中で、悲惨な水俣病が発生したのである。

水俣市に住む郷土史研究家・斉藤俊三氏は、水俣病発生の社会的背景を次のようにみている。

「戦時中、新日窒は大陸に大きな工場を持っていた。戦後、大陸から引き揚げて来た人たちは、水俣工場の労働者や水俣市民を、自分たちより一段階低い人間であるかのように取り扱った。植民地気分が抜け切れなかったのだ。水俣病という人命無視の公害が発生した素地がそこにあった」

水俣市は「チッソ」発祥の地である。先覚者野口遵が川内川の豊富な水力発電とこの地方の石灰石に目をつけて、小さな漁村だった熊本郡水俣村にカーバイド工場をつくったのが「チッソ」の始まりだ。明治四十一年のことで、いらい六十年の歳月が流れた。その間、水俣は「チッソ」を母体にして発展した。また「チッソ」は勢力を大陸まで伸ばして、昭和十二年には満州・朝鮮鴨緑江水電株式会社を設立、その水力発電施設は当時世界第二位の規模を誇った。

斉藤氏の話によると、戦前の水俣は争議のない平和な町だった。工場の巡視係長が推されて水俣町長になるという工場優位の町ではあったが、住民と工場との間には、気持ちの通うものがあったようだ。それが戦後"大陸勢"の引き揚げで一変した。

「第二次世界大戦中、地元の従業員は橋本さん（現水俣市長で、当時新日窒水俣工場長）を中心に工場を死守した。ところが、大陸から帰って来た人たちが地元勢を圧迫した。失敗もないのに解雇した。橋本さんも工場を追われる格好でやめた。それが、元来は民政党系だった橋本さんと労組を結びつけたのだ」―これも斉藤氏の見方である。

だがしかし、もう工場君臨の時代は終わりに近づきつつある。水俣市での工場の"勢力退潮"が、君臨を許さなくなった。そして「チッソ」が四十二年の八月、従業員の大幅配転などを内容とする合理化五カ年計画を発表してから、工場と地域社会との新たな連帯感が出て来た。「チッソ」の"やせ細り"を市民は心配し、「チッソ」は地域社会への責任を感じ始めたのである。

終戦直後「チッソ」の従業員は約五千人もいた。いまは「チッソ」が半減して約二千五百人、その他合理化で生まれた関連企業の従業員も含めて三千人そこそこである。水俣市の市税収入（固定資産税と法人税）に占める「チッソ」（関連企業も含む）のウエートも、三十五年度の四八・五％から四十二年度には二二％に落ちた。

「チッソ」をたずねて河島事務部長と樟山総務課長の話を聞いた。

「昔は、工場のエリートと一般市民は溶け合わなかったかもしれません。しかしいまでは、職員と労働者との給与の差も少なくなったし、市民との断層など全くない。自家用車を乗り回しているのは私どものようなホワイトカラーではなく、むしろ半農半工の労働者ですからね。それに、陣内社宅の奥さんも、いまはお高くとまってはいませんよ」

「お宅の新聞（この連載記事のこと）には、水俣病の患者は孤立していて、新潟水俣病の患者に比べてかわいそうだ、という趣旨のことが書いてありましたが、私どもはそうは思わない。新潟の鹿瀬電工（元昭和電工鹿瀬工場）は、患者のために何もしてやっていない。しかしチッソは患者への見舞い金も出しているし、年金制度もある。工場長以下幹部が患者を見舞いに回っている。誠心誠意やっています。だから患者互助会からも感謝されているんです」

二人はそう言って、いまの「チッソ」が地域社会、患者としっくりいっていることを繰り返し説明した。しかし患者は本当に心から工場に感謝しているのだろうか。とてもそうは思えない。また工場と市民の断層は、いまは全くないのだろうか。

「うわべだけですよ。市民と工場の関係がうまくいっているというのは、工場がPRする地域社会への企業の責任も、少し恩着せがましく聞こえる」「工場幹部による患者見舞いも、工場の経営が苦しくなったこと数年来のことで、経営が苦しくなったから低姿勢になったような気がする」―町かどで聞いた話だ。

ことしの一月、新潟県民主団体水俣病対策会議の人々が水俣に来て、水俣市の市民会議の人々と一緒に市内をデモしたとき、一般市民は"一方の耳をふさぎ、他方の耳をそば立たせた"という。忘れていた水俣病を思い出したくない気持ちと、新しく持ち上がった動きに対する強い関心の交錯した心理だ。その心理には、工場がどう反応するかをうかがう好奇心もまじっていたろう。

「チッソ」の、水俣市での比重の低下につれて、あるいは水俣病労働争議などを契機として、市民は「チッソ」によくモノを言うようになった。市民会議の結成も、その一つの現われだとみていい。

水俣市での、工場と市民の上下の関係はもはやくずれた。工場と市民は、工場がPRするような"溶け合った関係"ではないが、いまやっと"対等の関係"になりつつある。この市民の地位向上が、水俣での新たな公害発生の"抑止力"になっているように思われる。

チッソを母体に発展してきた水俣市全景